

實家に還りて母に慰めらるゝ事あるも、妾は遂に正しき道進まざりけり。かくて父母に心づかひ掛けし事も度々なりしが、今年十七歳の春初めて母の誠の身分とをひたちなどさゝてやうやく誠の人に歸り、看護婦志願にて某病院にあり。過ぎし事ども思ひ出づれば人に言ふはをろか、我と我身にはづかしき事多し。あゝ誰の罪なりや。妾は物淋しき夜半、獨過去の事ども思ひ出でゝは妾の實母遠山八重子をうらむ事すらあり、妾はかくて世をうらむ事多きが故に、母は猶我身を氣づかふなり、妾は母に向ひて安んじ給へ、妾は米國のモルヒネ夜叉トブパンを學ぶものにてはあらず、たよりなき病ひになやめる人のみとりするが願ひなり、といふが常なりき。

五。幸少かりし家庭に生ひ立ちて、今は多くの人に幸を授くべくなれる御身の上こそ奇しくも尊きけれ。

幼時の家庭

岡山操 女

私の生家は、昔よりの田舎家、住む人少うして、室の數多ければ、他に居を定むるの要なしとて、兄上の工場にて、使ひ玉ふ職人ども、十人餘宿らせ居れば、殊に賑やかなり、兄上は姉上を娶り玉ひて、十年目なり、其間に三人の子供生産したりしかど、皆亡せてたい今年四歳になる、國夫と云へるのみいとも愛でいつくしまれ、掌の上の蝶よ花よと、養育し玉へは、他の人等も皆御機嫌のみ取りて、萬殊の外我儘なりき。母上は未だ、年若けれど、八年前に父亡せ玉ひしより、世は兄上に譲りて、諸事心にまかせず、只國夫をいつくしみ玉ふ事のみ仕事の如し、この中へ丁度嫁き居たりし私の、三歳になる桂二と云ふを連れ子して

不縁となり、歸り來りしなり、嗚呼世に女はど、悲しきものはなし、如何に頼みに思ふ良人なりとて、如何に愛兒の大切なる父なりとて、心の變り玉ひて厭はるれば致方もなし、生家に父の在さば斯くまで遠慮もあるまじけれど、世捨人同様なる母上のみなれば、何事にまで、私等親子は、打敗けて平身わび入るのみ、されば國夫も子供ながらに、何時しか、悔りて私の言ひ聞かす事など、少しも聞かず、却つて廻らぬ舌にて口返事をなす様なりたり、初の程は母上も、同様に二人を取扱ひなされしかど、姉君の機嫌悪しければ、成るべく桂二に、馴れられぬ様、つとめ玉ひぬ、其の癖か桂二も遂に母上を厭ふ様なりたり、茶碗など桂二の粗勿にて、碎きたる時は姉上の舌うちならしめて、厭みを言ひ玉ふ事の、口惜しければ、何か持

てるを見付る時は、直にもぎ取るなり、故に此頃は何か持てば、後に手を廻し、隠す様なりたり、國夫は母上なり兄上なり、外出の後を逐ひて、是非従ひ行くなれど、桂二は後を逐へば、聞きわけのなき子よと叱られるれば後を逐はずなりたり、兄上土産を持ち歸へられるれば、國夫を呼びて包のまゝ與へらる、桂二は傍から、欲しがりて争ひとなる、一才兄なるだけに、何時も勝利は、國夫にあり、敗けたる事のくやしく、聲を限りに泣き立つれば、母上も見兼ねて、少し分配せよと、再三進められ、致方なきまゝ、少しむしりて、與ふれば桂二は手にも取らず姉君は是を見玉ひて「國雄や桂さんは少しどもは厭やだつて、皆か上げか前にはいゝもの上るよ」とて、美しい箱入の菓子をも、そのまゝ與ふ。されば國夫は前に抱込み居りしを投

り出すなり。凡べて子供は何にても同じ様なものをほしがれば、桂二も亦其の美しいのを、ほしがりて止まず、姉上は母上に「桂ちゃんは、人のもの物を出せつて、上げたものは厭だつて、意地が悪い事ね」と話されぬ、私は思へり、始土産を與ふる時に、二人に同様に分配して與へさへすれば何れも、善からんに」とされどそれを云ひ出せば又風波のもとなれば、何も得云はず、獨り心に思ふのみ、人知れず我膝に抱き上げては、涙はら〜と、過ぎし事ども思ふのみ。嘗ても金銭花の美しく咲き居る中に、とんば捕らゑんとて、二人そが中へ入り踏み倒す處へ、「これつ」と不意に聲をかけられて、一人はワツと泣きて逃げ歸へり、一人はエへへと、打笑ひ猶踏みにじりたり、同じ家に育てられながら斯くまで相違のあるべしと

は、さて、此先き如何にかならん、察し玉われよ諸姉よ、諸姉の中に私の子供の如き境遇の方、ありやなしや。

評。慘たる幼児の家庭、讀者をして同情の涙止めめえざらむ。吾は桂二氏の將來の多幸を祈るや切なり。

